

5・18 対 亜細亜大

16-2 「歴史的大勝」熱戦譜

中央大		TIME	S B O	JUDGE	亜細亜大
8 村田		2:41			D 荒嶋
4 坂本	H	2 5 0 0 3 4 0 2 2	18		4 福田
2 船井	中	0 5 0 0 3 4 0 3 1	16		3 三澤
9 亀井	亜	0 0 1 0 0 0 0 0 1	2		6 松田
3 福元	H	2 1 2 0 0 0 0 2 2	9		8 荒川
5 城下	B				7 清水
D 椎名	B				5 松浦
7 星	B				H 末澤
6 梶岡	B				H 赤瀬
P 青木	B				P 高越

神宮は燃えているか!?

こんな日があるものか。このコーンを独り占めしていいのかしら。

3ラン・ホームランが出たかと思ったら、次は満塁ホームラン、さらに……

打ちも打ったりの猛攻で、わが中大は大量16対2で亜細亜大をケ散らした。

東都大学野球1部春季リーグ。ロクに野球を知らぬ3人が神宮球場に出かけた。

5月18日—その日の、奇跡のような歴史的な大勝利。

春季は惜しくも2位、に甘んじたけれど。

阿部慎之助を輩出した中大硬式野球部、最近はどうなの? といぶかしげな在学生、

OB諸氏も多いにちがいない。お届けしたい。神宮は燃えているか!?

学生記者 西原香保里(経済学部3年) + 阿部恭子(総合政策学部3年) + 山口仁美(文学部1年)

西原が一番乗り。
正午すぎ、JR千駄ヶ谷駅を下車し、東京都体育館の前を過ぎる。アテネ五輪出場がかかる、全日本女子バレーボールの試合が毎夜繰り広げられていた。「ニッポン! ニッポン!」がこだます会場である。のち全日本女子は「強い女子」を見せてつけて、さつさと五輪出場を決めた。全日本男子はまるで不甲斐なかったけれど(その女子も五輪・世界の壁は厚かった)。
神宮球場に着いた。球場の外で、中大の選手たちが、試合前のアップに励んでいる。みんなデカイ! 黒い! スポーツマン! いつも見慣れている多摩キャンパスの男子学生とはやっぱり違う。思わず見入った。学割600円の入場券(一般1300円)を買って、球場に入る。前の第一試合、駒沢大—東洋大戦がまだ続いていた。
阿部と山口は、やや遅れて合流。多摩で10・50am終了の1限の授業がハネてから駆けつけたのである。多摩キャンパスから千駄ヶ谷までは、はるばると遠い。モノレールとJRを乗り継いで、かれこれ2時間



全員野球のお手本。猛攻に湧きかえる中大ベンチ

おまけに阿部は「神宮第2球場のほうに行っちゃって」、3塁側中大応援スタンドにたどり着いたときにはもう汗だく、手近なイスにへたりこんだほどの「大遠征」である。

うす曇り「ハレの予感」

中大先攻で、一番レフト藤澤が

右ボックスに入った。1時16分——サイレンが鳴る。「プレーボール!」。主審の声が高く響いた。

5月というのに、カンカン照りとも雨が降りたり来たりしていた。前日17日は曇りながら最高気温27・5度と季節を欺く蒸し暑さ。雨も心配されたが、18日はうす曇り。暑くなく寒くもなく、観戦取材にはもってこいの心地よさ。グラウンドの芝が濃い緑をためて深々と目に染みだ。

東京六大学は「土、日」の開催、東都は「火、水」に行われる。

2勝先勝で勝ち点1。1勝1敗で決着がつかない場合、3回戦がそれぞれ月曜日、木曜日に組まれる。雨天がはさまると、六大学の日程次第で東都の火・水もうしろに押されることがある。まあ、なにかと「六大学優先」なわけである。「うん、だからこうして神宮速報を聞いているんですよ。これが1番」と、野球部長・福原紀彦法科大学院教授はケータイの登録番号を押してみせた。「法科大学院の市ヶ谷だと近いからね、神宮にちよくちよく行くようになったよ」

多摩からの学生取材陣となるとそうもいかず、日程の変更なしはなにより。涼しげな曇天はじつに「ハレの日」の予感を抱かせるに十分でもあった。

猛攻——「応援歌ア……」

二回表。中大打線が亜細亜の先発・片山に襲いかかった。

先頭の六番・城下がレフト越えの二塁打、椎名の内野安打で一、三塁としたあと、八番・加藤が左越え二塁打を放ち、まず2点先取。1死後、一番・藤澤、ヒットで出た二番・山口を塁上に置いて、三番・新田。0—1後の2球めをた

たいだ。ぐんぐん打球は伸びて、レフトスタンドに飛び込んだ。

白地に青く「CHUO」のカッコいいユニホームが3人、つづいて塁を回る。応援団、チアリーダーの声と太鼓と踊りが歓喜してはじけた。「応援歌アアアア……憧れ高く空ひろく……ああ中央の若き日にイイイ」

「その回のリーダーで応援台に立ったときに得点が入ると、△応援歌を取る」と言うんですよ。自分がこんなに、応援歌を取ったの初めてです」と、詰襟学生服の久保田真さん(法学部2年)はきまじめに言った。もつとバンカラなカンジの是枝潔・準幹部(同3年)が全体のリーダー格膝をすりむかんばかりの「ずり足踊り」(ホントはなんと言うのかな?)も披露して、革黒靴の先っぽはぼつくり口が開いている。貫禄である。

バンカラの古式と、華あるチアリーダーの取り合わせ。両極の落差が互いを引き立て、ともに引き立つような、キツチュな交歓、いやこれは「シニール」で「ポップ」だ。見ようによっては。

ポンポンとミニスカート、そして最高の笑顔で選手たちどころか、観覧席にまで元気にさせるチャアリーダーたち。そのリーダー役の菅原あかねさん(法学部3年)に聞くと、「練習は週4日」だそうだ。「それ以外に個人的に練習する場合があります。こういった野球部やアメフトの応援もそうなのですが、チャアの内容がトがあつてそれに力を注いでいます」。



亀井、会心のグランドスラム

左バットが、みごとにフォームでうなった。白球はライナー性の弧を描いて、左中間スタンド中ほどに突き刺さった。春季第4号。応援席に近い

描に描いたようなシーンである。

二塁に村田、一塁に内野安打の山口。1死満塁で四番の主砲・亀井を迎えた。絵に描いたようなシーンである。

そうか、練習をそんなにしているからこんなに息のあったものができるんですね。中大が守りのわずかな時間のインタビュ。亜細亜大の打線は単調であつたという間に中大側の攻撃に。菅原さんは応援の舞台へ戻つていった。爽やかなスマイルを残して。

フルベース、バッター亀井

五回2死。新田と二塁打の亀井。2人を塁上に置いて、こゝろは城下がレフト柵越えの3点ホームラン。この回また3点を加えて、6-0。

三塁ベースを回るあたりで、亀井の紅潮したほおに会心の笑みがこぼれた。

前週の金曜日(5月14日)、日大が東洋大を連破し開幕8連勝で勝ち点4とし、最終週を待たずに6季ぶり22回めの優勝を決めていた(最終的には10連勝で完全優勝した)。中大は、この日大に2タテを食つたのが返す返すも惜しまれた。

4月6日からの第1週対青山学院大戦を2勝1敗で勝ち点1と上々のスタートを切りながら、次週の対日大戦、初戦0-1、第2戦は6-7、ともに1点差の惜敗だったのだ。

このあと、駒沢大に2勝1敗、東洋大に2連勝と勝ち進んだのだからなおさらである。

「いぶし銀」のOB応援団 中大生はいなくとも……

「今季は日大が強かったねー。1点差のゲームをしぶとく落とさなかつたからな。でも、中大も亀井選

手と会田投手がよかったよ。会田は去年、2番手だったけど、今年は投げ方が良くなったな、うん」



熱きOB応援席

観戦の宇田川吉順さんの解説である。昭和39年卒、63歳。2年前定年退職し、それから全試合欠かさず球場に足を運んでいらつしやる。

隣の席から、観戦仲間が宇田川さんの手元を熱心にのぞきこんでいる。見ると、スポーツ新聞の切り抜きに、選手名簿のコピー、宇田川さんお手製の全選手の今季成績記録まであつ

た。お金をかけた、「公式記録」の趣。いまや中大公式野球部の生き字引、応援席の主のようである。

—— 一番印象に残っている試合は？

「やっぱり阿部（慎之助）のときだよ。4年前の対亜細亜大戦。1勝1敗1分けのあと迎えた第4戦。ゴールデンウィーク中で、スタンドは満席だったなあ。今年の中大、秋季はいけるんじゃないかな。日大の那須野（投手）さえ攻略すれば」

優勝してほしいという思いは毎シーズン1回必ず足を運ぶ牧憲俊さんも変わらない。昭和44年卒、57歳。公認会計士でいらっしやる。仕事の傍ら、野球だけでなく、相撲やボートも見に行っている。「やるからには優勝してほしいよね」

前日17日、神宮は東京六大学でわいた。早大の5連覇を阻み、明大が12季ぶり31度めの「V」。これが早慶戦ともなると、さらに盛り上がり、スタンドも超満員のテレビ映像が流れる。

—— というのに……この日の応援スタンドは寂しい。応援団十チアリーダー十まだベンチに入れない野球部



応援団員の熱血リードに呼応して

員のカタマリ20人ほどはれつきとした在学生だが、ほかに中大生の姿が見当たらない。私たち3人がいるにはいたが。だからOBの常連の方々が「いぶし銀」の存在感を放つてみえる。あつちに5人、こつちに3人、離れて5、6人。指折り数え……ないほうがいいかな。

もう元気いっぱいである。私たちとは比べものにならないくらいアツい。立ち上がって応援歌。突き上げるこぶしのリズムもみごとにそろって。喝采を送り、また一喝したり。心強い。

「いやー、安心してみていられるねえ。きょうは楽しく応援してるよ」

と、これは昭和39年商学部卒の松浦勝さん。

—— 昔から応援にいらしているんですか？

「そうだね、昔は校舎（駿河台）が神宮に近かったし、授業の空き時間や暇なときはきてたね。今は八王子にうつったけど、あつちにも応援に行くこともあるよ」

—— 駅伝なども？

「そう、箱根駅伝やラグビーなんかも中大を応援しに行くんだよ」

インタビュウ中も、目は選手の動きを追って、「よし、よし」とか「うん、うん」と声が飛び出すのである。



華あるチア・リーダー

—— 昔から応援にいらしているんですか？

「毎年来てるよ。長崎から来てるんだ。こんなに遠い私が来てるんだからみんなもつと応援に来なくちゃ」

—— ことしの中大は。

「ことしはいいよ。日大もよかつたけど、試合は1点差だったし紙一重だった。本当に残念。実力はあるから秋には絶対に優勝してほしい。それで八王子をパレードしてほしいね。『実力の東都、人気の六大学』って言うってね。中大は六大学に誘われてただけど、その時にはもう日大とかとリーグ戦やりましようって約束して、律儀に断つた、そんな歴史がある。昔から中大はそれくらい強いんだよ」

—— ほとぼるる母校愛、ですね。

「私はね、中大が生きがいなんだよ。朝から校歌と応援歌を聞いてファイトをもらうんだ。そのうち歌い出しちゃってね(笑)。応援団じゃ

長崎の人

ないけど自称応援団！ 周りもみんな『もう応援団だよ』って」

「長崎にいて試合が見れないときも、試合が終わるとすぐ、ホラ隣にいる私設応援団の長田さんから電話がくるんだよ。『対○で中大が勝ちましたよ、ヤッター！』って。勝つても負けても、必ず次の日にコンビニで新聞を買って誰が打ったとか全部チェックするんだ。もちろん野球だけじゃないよ、スポーツ全部応援してるんだ。やっぱりOBが支えないとダメ。長田さんはすごいよ。手帳を見てごらん」

その長田孝弥さん、同じ28年卒。手帳を見せていただく中央大学の応援で予定はびっしり。「これを全部応援に行くんだ。試合の経過も全部メモしてるんだよ」

学生記者は、頭が下がりがりっぱなしである。

廣瀬さんはおっしやった。

「中大を卒業したOBのみなさん絶対優勝できるようにバックアップをしていきましょう！文武両道を目指して、まずはスポーツを強く！」

8回表から長田さんはいよいよ立ち上がり、日大の旗を振って応援をし

始めた。博愛精神である。

長短18安打：記録的なスコア

中大は八回、途中から新田に代わった三番新井の二塁打などで3点、九回にも加算して計16点。本塁打4本、二塁打6本、長短18安打の猛攻だった。

投げては、今季大活躍のエース合田が六回まで安定したピッチングで1点に抑え、小林、松山、青木とリレーして九回1点を与えたものの垂細垂打線を軽く封じた。

16―2。スコアボードの、記録的なスコアがおおきく浮き上がって見える。時に3時57分。試合時間2時間41分。

スタンドのOB陣も「13、4点くらい試合はあったが、こんなの初めてだよ」と口をそろえて、満面の笑み。

バックネット裏には、中大の42年春季優勝の立て役者、末次民夫・巨人スカウトらの姿があった。プロ球団のスカウトの目は一人の選手に熱く向かっているようである。

中大主将、四番・亀井義行右翼手。

右投げ左打ち、商学部4年生。この日満塁本塁打を含む3安打5打点の活躍で打撃2部門（4本塁打、15打点）のトップに立った。

スタンドの“解説陣”から聞いてみよう。

廣瀬さん「亀井はいいよ。ドラフトがかかっている。秋にホームラン2、3本打ったら決まりだよ」

また別のOBは「肩もいいからね。ライトから、イチローばりのレーザービーム。姿かっこうもイチローに似てるだろ」。

翌日の「日刊スポーツ」は中田・



卒業後の去就も注目される亀井義行選手

中日編成部長のこんな高評価のコメントを載せている。
「肩（遠投110メートル）足（50メートル走6秒3）は文句なし。パンチ力もあるし自由獲得枠に入ってくる可能性もある」

亀井選手インタビュー

試合後、その亀井選手を、阿部はベンチ裏のロッカールーム前で待ちかまえた。清水達也監督によるミーティング、それに選手たちが汚れたユニフォームを着替える部屋である。20分ほどしてから、亀井選手が出て

きた。ドキン、とするようなカッコよさである。日焼けした顔、179センチとさほど大きくはないが、すらりと均整のとれた勇姿。74キロ、腹なんかぜんぜん出ていない。

大量得点でしたね。

「きょうの試合は打線がよくつながって、満足。満塁打も打って、文句はなしです！」

——今季を振り返ってどうでしたか？



処 如
「残務」を横に、女子マネージャーを横に、野球部部長の福原紀彦

野球部女子マネージャーを横に、「残務」処
理中の福原紀彦野球部長

47年春、48年春、49年秋、54年春、59年秋、62年春

昭和42年春、45年秋、
十分に活躍ぶりである。
「04秋・V」をねらう
塁手の計4人が選ばれた。

「いやね、シーズンが終わると、この仕事が大変なんですよ」のぞきこんでみると、「公欠届」だった。

正式には△「課外活動にともなう授業配慮願」(公欠届)▽。受講講座の担当教員にあて、

△上記学生について、本公式試合に出場することについて相違ありませんので、公欠の扱いについてご配

04年秋季リーグは、9月4日開幕。中大は対青山学院大戦(第2週)で連敗スタートとなったものの、つづく対東洋大戦(第3週)を6-0、4-2で連破して勝ち点1、勝率5割に(9月末現在)。

「戦国東都」は荒れ模様である。

「春は2位で、まあいいかたちで終わることができました」

——秋はイケそうですね。

「チームの調子もよくなっているし、ぜひがんばりたいと思います」

選手たちは、そのまま専用バスに乗りこみ、大学の球場に近い八王子・堀之内の寮に向かった。

見送りながら、「メンバーはバスでここまで来ますけど、俺らは自腹きって往復電車です」と村越大介さん(文学部2年)。スタンド応援・野球部員の一人である。うーん、まあ仕方ないだろう。これも試練のうち

か。来年はバスに乗れそうですか?と聞くと、「がんばります」と一言。スポーツ選手の言葉は、いつも短い。

ベストメンバーに4人 期待の秋:

翌日、中大は2-1-3と亜細亜大に譲ったものの、三回戦(5月20日)を2x-1で勝利して、シーズンを終えた。勝ち点4で日大に次いで堂々の2位。

「優勝しなかったら2位も6位も一緒」(清水監督)と厳しい総括も必要なのだが、東都リーグ・ベストナインに、亀井主将(2度め)をはじめ、リーグ2位の打率(4割1分5厘)を誇った山口健太・二塁手(文

と優勝が珍しくなかった東都の雄・中大の歩み。「黄金の昭和」である。それが、改元したとたんに、長き「平成の低迷」。平成2年東都1部から2部に転落、11年秋、阿部慎之助らの活躍で1部復帰したが、優勝から遠ざかって久しい。

長いトンネルを脱して、16年ぶりの「V」はあるだろうか。

中大の春季公式戦が終了した翌日(5月21日)、多摩キャンパス1号館(事務棟)で、福原・野球部長を見かけた。法学部教授会が開かれて

いる会議室手前の広間である。机を出して、うず高い書類の一枚一枚に万年筆で忙しく署名していらっしやる。

「いやね、シーズンが終わると、この仕事が大変なんですよ」のぞきこんでみると、「公欠届」だった。

正式には△「課外活動にともなう授業配慮願」(公欠届)▽。受講講座の担当教員にあて、

△上記学生について、本公式試合に出場することについて相違ありませんので、公欠の扱いについてご配

慮のほどをよろしくお願ひします▽という文面になっている。

「これまで個々に受講科目の先生方にお願ひしていたが、去年からやっとこんな制度ができたんですよ。選手たちにはがんばってほしいからね」

といて試験のハードルが下がるわけではない点が本学の「カタイ」ところだが、選手たちのほか、応援団やチアリーダーたちも同様だそう

だ。

学生記者は「公欠届」などなくて……西原と阿部は試合後、また授業のため多摩にとんぼ返りし、山口はバイト先へと急いだ。

半日がかりの距離の遠さを呪い、しかしなんとという幸運、この目で目撃した「歴史的な大勝」の美酒に酔いながら。

04年秋季リーグは、9月4日開幕。中大は対青山学院大戦(第2週)で連敗スタートとなったものの、つづく対東洋大戦(第3週)を6-0、4-2で連破して勝ち点1、勝率5割に(9月末現在)。

「戦国東都」は荒れ模様である。